

王雲五と鄭振鐸

——商務印書館史の一断面——

はじめに

本稿は、一九二〇年代の初頭、ほぼ時を同じくして商務印書館（以下商務と略称）に入った王雲五（一八八八—一九七九）と鄭振鐸（一八九八—一九五八）との確執を概観することを通して、この約十年間の商務が抱いていた問題に一つの照明をあててみることを目的としている。

いったい、中国近代の文化界を考える上で、商務は非常に重要な位置を占めていると思われるが、商務そのものが研究対象にされることは、あまり多くなかったようである。そんな中で、日本の金港堂との合弁問題を中心⁽¹⁾に、初期の商務に光をあてる論文を発表し続けているのが樽本照雄⁽²⁾氏で、同氏によると、この分野の先行研究としては、長沢規矩也⁽³⁾、美藤恵秀⁽⁴⁾、中村忠行⁽⁵⁾、矢作勝美⁽⁶⁾各氏の論考があるという。

松村茂樹

ただ、管見の及ぶ限りでは、現在のところ、商務に対する関心は初期に集中しているようである。だが、五四の後、大きく脱皮をとげることになる時期の商務について分析を加えることも非常に重要であると思われ、本稿が論じようとする王雲五と鄭振鐸が共に商務に在籍した一九二一年から一九三一年にかけての十年間は、ちょうどこの脱皮の時期に重なる。

よって、後述するように、商務の総経理となつて、経営の中心となる王雲五と、茅盾から引き継いだ『小説月報』の主編を長くつとめて、後に文学者として名を成すことになる鄭振鐸の二人が、この脱皮の時期にどのようなかわりかたをしたのかを見てゆくことにより、当時の商務がいかなる性格を有していたのかを考えることの意義は、決して小さくはないと思う。

一、『小説世界』と『婦女雜誌』

一九二二年五月一日、鄭振鐸は商務の編訳所⁽⁸⁾に入った。彼の入所は茅盾の紹介によるものであったが、この半年前、すでに所長の高夢且と会っており、高夢且に将来性を見込まれていたという⁽⁹⁾。ちなみに鄭と高は福建長楽の同郷人で、当時の商務には「福建閩」らしきものがあつたとも言われているので、鄭振鐸の入所にはこのことが関係していたのかもしれない。

鄭振鐸の入所から四か月後の同年九月一日、王雲五是商務編訳所に高夢且の後任所長候補として入った。実は高夢且は新時代に対応するべく、新文化運動の旗手・胡適を自らの後任に招こうとしたのだが、胡適に断られ、代りに王雲五を推薦されたのである⁽¹⁰⁾。つまり、王雲五是商務とは何の関係もなかった胡適の紹介で商務に入ったわけで、当然「福建閩」など商務派閥の外に置かれ続けることになる。こうして二人は商務で初めて出会うこととなった。そして鄭振鐸は『児童世界』の主編を一年間つとめた後、一九二三年一月一日発行の第一四巻第一期より、茅盾に代つて『小説月報』の主編に就任⁽¹³⁾し、王雲五是編訳所長就任後、一九二二年末までに朱経農ら新たな人材を引き入れて、自

らの体制がためをしつつあつた⁽¹⁴⁾。

そして一九二三年一月、二人に『小説世界』という雑誌の創刊をめぐる確執が生じることになる。このことについて述べるには、まず『小説月報』のいわゆる「革新」についてさかのぼって説明しておかねばならないと思われるので、茅盾の回憶をもとに、この前後の状況をまとめておきたい。

いわゆる「革新」前の『小説月報』は、茅盾に言わせると、封建思想と買弁意識がまじり合った礼拝六派（鴛鴦蝴蝶派）の作品が独占していたが、一九二〇年一月発行の第一一巻第一期から、いわゆる「半革新」がなされ、紙面の三分の一を「小説新潮」欄とし、茅盾が責任者となつて、新しい傾向の作品を掲載するようになった。また、当時の主編であつた王蕁農も礼拝六派に気がねをしながらも、新傾向作品の比率を増やして行ったが、結局、新旧入りまじる「半革新」状態では読者をつかんでおくことができず、発行部数は徐々に落ち込んで行き、第一一巻第一期は二千部しか印刷されなかつた。これは商務の資本家側にしてみれば赤字に他ならず、かくして王蕁農は赤字を認めない資本家側の圧力、および新旧兩派の板ばさみに苦しんで『小説月報』主編を辞任し、その後任として高夢且は鄭振

鐸らと共に文学研究会を發足させつつあった茅盾を指名した。一九二〇年一月下旬のことである。こうして茅盾は一九二一年一月発行の第一二卷第一期より『小説月報』の主編となり、いわゆる「完全革新」をはたした。すると低迷していた発行部数が伸び始め、第一二卷の第一期は五千部を印刷してすぐに売り切れ、第二期は七千部を印刷、そして第一二卷の末期には一萬部を印刷したという。茅盾は「革新」後の『小説月報』がこれほどまでに部数を伸ばしたことで、

頑固派の新思想に対する憎悪も、ついに彼らの押金主義勢力のもとに屈したのである。⁽¹⁶⁾

と述べているが、実は茅盾の言う「頑固派」つまり礼拝六派およびそれにつながる商務の保守勢力は、ここで決して「屈し」はせず、商務から新たに礼拝六派のための雑誌を出そうとしていたのである。

この頃、鄭振鐸は前述の通り『兒童世界』主編をつとめるかたわら、「革新」後の『小説月報』にも次々と翻訳や詩などを発表していた。⁽¹⁷⁾そしてもちろん鄭振鐸にも礼拝六派のための新雑誌創刊の動きが伝わって来ることになる。

『鄭振鐸年譜』一九二二年一〇月三日の項に、

周作人に手紙を出し、「上海方面はまったくダメです。

礼拝六派の勢力がとても盛大なのです」、「商務は近頃また小説の週刊誌を出すつもりでいます。原稿を書くのもめようとはしましたが、彼らにはあまりわからないようです」、「それが出版されてから、私達は上海で攻撃を加えようと思います」と述べ、あわせて周作人に北京で応援してくれるよう希望している。⁽¹⁸⁾

とあり、鄭振鐸がこのことに不快感を持っていることが窺える。

この時、商務が出そうとしていた礼拝六派のための新雑誌が『小説世界』である。鄭振鐸ら「新文学」側にとっては、礼拝六派の作品は、社会に害をなすものでしかなかった。だが、王雲五は側近の葉勁風を主編として、一九二三年一月五日、『小説世界』を創刊したのである。⁽¹⁹⁾これに対し、「新文学」側は当然次々と異議を唱えた。

まず錢玄同が一九二三年一月一〇日付の『晨報副刊』に「出人意料之外」的事を発表し、魯迅の「他們的花園」を引いて「新文学」側に礼拝六派の汚濁にまみれないよう警告した。そして続いて鄭振鐸が同年一月一五日付の『時事新報』に「《小説世界》与新文学者」を発表して『小説世界』発行を批難し、魯迅も同日付の『晨報副刊』に「関

於『小説世界』を發表して、同年一月一日付の同じく『晨報副刊』に掲載された礼拝六派側の意見である東枝「小説世界」に反論している。

これらはいくまで「新文学」側の『小説世界』創刊に対する異議申し立てであり、鄭振鐸と王雲五の個人的論争ではなかったが、『小説世界』創刊を認めた王雲五の身近にいた鄭振鐸としては、王雲五個人に対する憤懣を必ずや有していたことであろう。

ただ、王雲五の方は鄭振鐸の憤懣をとりたてて気にしていなかったようである。なぜなら、『小説世界』創刊号には、「請読第十四卷の小説月報」と題する宣伝文が掲載され、鄭振鐸が茅盾の後をうけて初めて主編をつとめた第一四卷第一期の『小説月報』の購読が読者にすすめられており、また、鄭振鐸と志を同じくするはずの茅盾（ここでは沈雁冰名を用いている）の「私奔」という一文が掲載されている、「新文学」側の人物にも『小説世界』の頁が与えられているからである（これに対し、鄭振鐸主編の『小説月報』には広告欄以外に『小説世界』の名さえ見えない）。これは王雲五の脱イデオロギーととれないこともないが、それよりもっと単純に、王雲五は企業経営を考えていただけと考えた方がわかりやすい。つまり、王雲五は商

務の経営側の人物なのであるから、まずは利潤をあげることを考えるのが普通で、『小説月報』の「革新」により、「新文学」側の読者層を大きく増やしたものの、このことよって、礼拝六派の愛読者層を失ったことは確かなのであるから、これを拾い上げるために『小説世界』を創刊しただけなのでは——と考えるのである。これを裏付けられそうな記述がある。前に触れた一九二三年一月一日付『晨報副刊』に掲載された東枝「『小説世界』の一節を見よう。

（商務を『小説世界』発刊に向かわせた外部からの刺激の）第一は、近年来、小さな出版社が適当に何人かの斯文流氓（礼拝六派の作家をさす）を雇い、大々的に『礼拝六』（復刊）、『星期』、『半月』、『紅』、『笑』、『快活』を出したところ、意外にも大もうけをしたことで、第二は、商務は（「革新」前の）第一一巻までの『小説月報』の読者からの手紙数千通を受け取ったが、どれもが『小説月報』は改良すべきでないと言ったというところが言われていることである。

つまり、礼拝六派の作品はまだまだ売れたのである。さすれば、経営側の王雲五が礼拝六派の作品を掲載した雑誌を持つておくべきだと考えるのは、むしろ当然のことと言えるのではないか。

このことをもつと直截的に述べているのが一九二三年一月二三日付『晨报副刊』に掲載された荆生「意表之中的事」に見える次の一節である。

商人（商務をさす）は何をもつて究極の目的とするか？ 金もうけである。文氓（礼拝六派の作家をさす）は何をもつて究極の目的とするか？ 金もうけである。ならばもうけるべき金がありさえすれば、彼らがすぐ「排泄物」を製造販売して人に食べさせようとするのも、まさしく当然のことで、なおかつ私達もそれを非難することはできない。なぜなら彼らの事業はもともと手に入るものが白ければ銀、黄色ならば金ということだけが大切だからである。売り出したものがたとえ何であろうとも……。

先にあげた東枝は礼拝六派の側に立って述べているわけであるが、この荆生は「新文学」側に立って述べている。すなわち「新文学」側も礼拝六派の作品は、少なくとも「金もうけ」にはなると考えていたということになる。「新文学」側はそんな「金もうけ」を批判しているわけであるが、こういった論理が経営側としての王雲五には通じなかつたとしても、これはいたしかたのないことであろう。

さすれば、この『小説世界』をめぐる王雲五と鄭振鐸の

確執の構図は、王雲五が経営側の論理で創刊した『小説世界』に対し、鄭振鐸が「新文学」側の理念でもって憤慨したというものであったことになる。だが、そもそも鄭振鐸は商務編訳所における王雲五の部下なのであり、企業論理から言うと、経営のことを考えて行かう上司の意向に、部下は従わねばならない。なのに鄭振鐸は、上司である王雲五に「理念」で反抗していたのであるから、王雲五もやりにくかつたことであろう。

そんな二人に一九二五年から翌年にかけて、商務が出していた『婦女雜誌』をめぐる、第二の確執が起ることになる。

『婦女雜誌』は商務が一九一五年に創刊した女性誌で、王蕁農の後をうけて章錫鋆が主編をつとめていた。⁽²⁰⁾ その章錫鋆の言うところによると、

一九二五年一月発行（『婦女雜誌』）の「新性道德專号」において、私が書いた「新性道德是什麼」と周建人が書いた「性道德的科學標準」の両文は、『現代評論』で北京大学の有名教授・陳大齊の糾弾を受け、王雲五を大いに狼狽せしめた。彼は私に、以後、毎号割り付けされた校了ゲラを自分に送らせて審査し、その上でやっと印刷に付した。⁽²¹⁾

ということがあったという。そして更に章錫琛が言うには、王雲五は抗議の辞表を提出した章錫琛を国文部に遷し、周建人を『自然界』主編に遷した上で、『婦女雜誌』主編には、能力に乏しい杜就田をすえた。これに鄭振鐸らが憤慨したというのである。章錫琛の言をつづけよう。

胡愈之、鄭振鐸および館外の友人・吳覺農らはこれにすこぶる憤慨し、私と周建人に別の女性誌を編集することをすすめた。幾度かの討議を経て「新女性社」を組織することを決定し、社を宝山路三德里の吳覺農の家におき、吳覺農が表向きの編集発行人となつて、次の年（一九二六）の一月に『新女性』創刊号を出版した。しかしこのことは早くに商務に知られてしまい、（杜就田のいとこで張元濟と親しかった）杜亜泉はこれはひどく紀律に違反した不道德な行為だとして、王雲五に私を解雇するよう要求した。

こうして王雲五に商務を追われた章錫琛を、鄭振鐸ははげましつつ、鄭振鐸の支持のもと、章錫琛は一九二六年八月、開明書店を創立することとなるのである。⁽²²⁾

ただ、このことも王雲五にしてみれば、章錫琛、そして鄭振鐸という部下の反抗に他ならない。鄭振鐸らにも彼らなりの正義があつたに違いないが、商務に籍を置いたま

ま、商務の『婦女雜誌』に対抗する雑誌（『新女性』）を出すようなことをされては、組織の長たる王雲五としては放置できなかつたのであろう。

こうした『小説世界』、『婦女雜誌』をめぐる王雲五、鄭振鐸の確執から、思想対立と同時に、王雲五が進めた経営組織の強化、つまり、「近代化」に伴う問題が看取できる。

二、労資対立

さて、『婦女雜誌』の問題が発生した一九二五年は、いわゆる五卅事件が起こり、中国革命史の上でも、一つの転換点となつた年である。この事件をきっかけに労働運動が高まりを見せはじめ、共産党は職工会（労働組合）の結成を訴えた。そしてこれに応じて商務でも同年六月二日に職工会が成立し、鄭振鐸も委員に選ばれている。⁽²³⁾

実はこの二年前の一九二三年一〇月一〇日、鄭振鐸は高夢旦の四女・高君箴と結婚していた。⁽²⁴⁾つまり資本家側の高夢旦と義理の親子関係を結んでいたわけだが、鄭振鐸は決して資本家側に回ろうとはせず、職工会の代表の一人として、資本家側と対決する道を選んだわけである。

そして商務職工会は成立から二か月後の一九二五年八月二二日、「商務印書館職工会罷工宣言」⁽²⁵⁾を出して、商務資

姓名	職別	民國十年(一九二一)	十一年(一九二二)	十二年(一九二三)	十三年(一九二四)
高翰卿	監理	八千元	八千元	七千元	五千九百五十元
張菊生(元濟)	監理	八千元	八千元	七千元	五千九百五十元
鮑仲言(咸昌)	總經理	八千元	九千元	九千元	六千七百五十元
李拔可	經理	六千元	七千元	七千五百元	六千三百七十元
王顯華	經理	六千元	七千元	八千五百元	七千二百廿五元
高夢且	所長	六千八百元	七千元	六千五百元	五千五百廿五元
王雲五	後任所長	八百元	四千元	五千元	四千二百五十元

本家側に待遇改善を要求し、ストライキを決行した。この宣言文を読んでみると、資本家側の「花紅(賞与金)」が桁外れに多いことが暴露されており、宣言文が収められている『中国現代出版資料(甲編)』の編者がつけた注には右のような表が載っている。ちなみに宣言文によると、一般労働者の「花紅」は月給一〇余元の人なら年に一〇余元であり、月給より少ない場合もあったという。だがここで注目しておきたいのは労資の待遇格差ではなく、王雲五の「花紅」の伸びの大きさである。王雲五は商務入館後わずか数年で、張元濟や高夢且に次ぐ資本家側の実力者となっ

ていたことがわかる。

そんな資本家側に対抗する形となっていた鄭振鐸は、ストライキ突入の二日後にあたる八月二四日、職工会の代表(二三人)の一人として交渉のテーブルにつき、そして八月二九日、資本家側から賃上げ回答を獲得することに成功している。

こうした労資交渉に、王雲五は商務資本家側の実力者として出ていかねばならなかった。王雲五はこのことをたいそう気に病んでいたようなのである。王雲五自述の回憶を

民国一五年（一九二六）頃からだつたらうか、上海では勞資紛争がしばしば起きており、商務の職工会は当時の企業界で最も強い力を有するうちの一つであつた。紛争のはじまりは、当然印刷所が主となり、発行所および総務処がこれに次いだ。編訳所では少数の別に下心を持つてゐる者が活躍してゐたものの、大多数は皆新旧の学者であつて、態度は当然はるかに穩健で、少数の別に下心を持つてゐる者も、多くが含蓄を有してゐり、率先してうるさい問題を起こしたり、激しい態度をとつたりはしようとしなかつた。……（中略）……当時の総経理は印刷所所長の鮑（咸昌）先生が兼任してゐたが、すでに高齢で、篤実な人柄であつたため、言辞をよくせず、その他の経理、協理らもまた多くがこのタイプであつた。よつて、なにかの勞働争議が激しくなると、私が身を挺して出て行かざるを得なくなり、その結果、対応よろしきを得たなら、波風はやんだ。この後、ひとたび勞資紛争となると、資本家側は皆一致して私を出馬させて対処させ、ついに責任を負うべきではない私に、全面的責任を転嫁したのである。⁽²⁹⁾

そしてこういつたことはいや気がさした王雲五はついに商務離脱を決意するのである。⁽³⁰⁾

ここに引用した王雲五の言からは、商務離脱にいたる彼の胸の内がよく窺えるが、それ以外に、

① 「別に下心を持つてゐる者」という表現で、王雲五が商務編訳所内部の反抗分子の存在をほのめかしていること。

② 商務資本家側が王雲五に勞資交渉をおしつけ、勞働争議から距離を置こうとしていたこと。

という重要な二つのことがらも同時に窺うことができるのである。

①の「別に下心を持つてゐる者」は、これまで述べて来たように、鄭振鐸をはじめとする「新文学」側であり、なおかつ職工会の代表をつとめてゐる人々のことであろう。王雲五は「率先してうるさい問題を起こしたり、激しい態度をとつたりはしようとしなかつた」とは述べてゐるものの、やはり組織の秩序に従わない頭の痛い存在だったからこそ、わざわざこれらの人々のことを持ち出しているのだと思われる。

②については、これを傍証するような記録が『張元濟年譜』「一九二五年一月二十五日」の項に見える。⁽³¹⁾これによると、この日、張元濟らが高翰卿の家で特別董事会を開いてゐると、經理の王顯華が勞働争議を押しやるため軍警を

動員し、労働者と衝突して負傷者を出したとのニュースが飛び込んで来た。すると張元濟は、

涙を流して平和的交渉を堅く主張し、李拔可、夏鵬、莊俞、盛同孫の四人にすぐ総公司に行ってもらい、王顯華、王雲五と一緒に協議条件一切の事務を処理させた。という。この一節から、労働争議の現場にいたのが王顯華、王雲五の二人であったことがわかる。そして王顯華は武力行使に訴えるところまで追いつめられていたのである。このように張元濟らが現場から離れたところで会議を開いている時に、王雲五は労資交渉の最前線に立たされていたのだ。このようなことが王雲五には不満だったのである。

つまるところ、王雲五は獅子身中の虫とも言うべき鄭振鐸ら反抗分子の行動に悩まされつつ、そんな反抗分子が代表となっている職工会とやりたくもない労資交渉を最前線で行っていたのに、案外資本家側も頼りにならないという、いわば八方ふさがりの状態に置かれていたのである。だが、このような王雲五の存在があればこそ、当時の商務はなんとか存続し得ていたのであろう。その証拠に、王雲五の離脱後、商務は王雲五を総経理として呼び戻すのである。

四、鄭振鐸の離任

商務離脱を決意した王雲五は、一九二九年一〇月上旬、商務を去り、当時、蔡元培が院長をつとめていた中央研究院社会科学研究所に、研究員兼法制組主任として入った。⁽³²⁾

だがそのわずか一か月後の同年一月九日、商務総経理・鮑咸昌が逝去し、その後任に王雲五をとの意見が商務資本家側に出た。そして翌一九三〇年一月二三日の商務董事会第三六九次会議で、王雲五は総経理に選任されたのである。王雲五は最初これを固辞したが、張元濟、そして高夢旦の説得に応じ、総経理就任を決意した。⁽³⁴⁾ただその際、王雲五は二つの条件を出している。王雲五自身の言を見よう。

いわゆる二条件であるが、その一は、現行の総務処の合議制をとりやめて、総経理独任制に改め、経理、協理および所長はおのおの協力の責任をつくす。その二は、私は総経理を引き継いだ後、すぐ出国して科学管理を視察研究することとし、その期間は半年、その後⁽³⁵⁾に帰国して責任を負うことを実行するといふものである。⁽³⁶⁾

この条件、とりわけ「その一」の方はなかなか強硬なものであったが、資本家側はあっさりこれをのんだ。⁽³⁶⁾当時の資

本家側が、いかに王雲五を必要としていたかが窺えよう。

こうして王雲五は総経理となって商務のトップに立ち、半年間の海外視察を経て、一九三〇年九月一三日、いわゆる「科学管理法」を商務幹部と職工会に宣布し、翌一九三一年一月一〇日には、編訳所の管理強化をめざして、編訳員とその仕事内容を等級付けること、および最高人事権を総経理が掌握することなどをうたった「編訳所編訳工作報酬標準試行章程」³⁷⁾を施行した。だがこれに対し、管理強化を嫌う職工会が猛然と反対し、同日、鄭振鐸らは職工会の他に特別委員会を組織し、このことにしほって王雲五と交渉した。そして同年一月一五日、商務編訳所職工会は、「商務印書館編訳所職工会宣言」を発表し、王雲五の管理法に徹底して反対していく方針を表明したのである。³⁸⁾この宣言の前文を紹介しておこう。

わが編訳所は開設されて三十余年、ずっと平穩無事であつた。だが最近、王雲五がいわゆる「科学管理法」を施行しようとし、事前にわが職工会の同人と協議せず、また、党政府当局の許可を得ずに、一月九日、いわゆる「編訳所工作報酬標準試行章程」を公布し、翌日施行した。わが職工会同人は、不審にたえない。そこで一四日、党政府当局に届け出て、全体会議を召集し、一致し

て議決したことは、このように勝手に契約を変更し、著作界を圧迫するやり方は、決して承認できないということであり、あわせて以下の宣言文を発する。(以下宣言文)

そして宣言文中では、王雲五の行為を徹底的に糾弾している。³⁹⁾こうして王雲五と編訳所職工会は全面対決に突入した。

だが職工会側の反対は王雲五にとって意外なものだった。王雲五自身も、

本心に思いがけなく、二〇年(一九三一)一月、私が科学管理計画の実行を開始することを宣布した時、突然四つの職工会の共同反対に遭つた。⁴⁰⁾

と述べ、そして、

私がひそかに調べたところによると、これは編訳所職工会の主導にかかるものであり、同職工会の主導となつた原因はとても複雑で、左傾分子が背後で操つていた以外に、なお高級人員の加担があつたと聞いている。⁴¹⁾

とその理由を分析している。ここに言う「高級人員」とは、前に王雲五が述べるところの「別に下心を持つている者」と重なるのであろう。つまり鄭振鐸ら反抗分子のことである。

このような反抗分子の行動に業を煮やしつつも、結局王雲五は編訳所職工会側に押し切られる形で自らの案を撤回し、原料、機器等および財務に対してのみ「科学管理」を行うことで収拾をはかった。⁽⁴²⁾

こうして鄭振鐸ら編訳所職工会側は、対王雲五闘争に勝利する形となった。鄭振鐸はこの後、

今回の教訓から、私達は自己の力量を知った。⁽⁴³⁾
と語ったという。

だが今度の鄭振鐸らの王雲五に対する「反抗」は、これまでよりもずっと重大になっていた。王寿南『王雲五先生年譜初稿』には、王雲五の「科学管理法」に関する条文や記録が大量に残されているが、この綿密な、そして周到な管理計画を作成するにあたっての王雲五の労苦は並大抵ではなかったであろうことが窺える。なのに「編訳所編訳工作報酬標準試行章程」という「科学管理法」の重要な一角を、鄭振鐸らはたたきつぶしたのである。ここまで来ると、王雲五、鄭振鐸の二人は、決して商務という一つの組織に共存できる存在ではなくなっていた。

そして「科学管理」にまつわる紛争が終息して八か月とたたない一九三一年九月七日、鄭振鐸は事実上の辞職届である半年間の休暇届を提出して商務を去り、北京の燕京大

学と清華大学の教授に就任した。⁽⁴⁵⁾

この鄭振鐸の商務離任の理由について、鄭爾康は、

一九三一年末、鄭振鐸は北京大学で教えていた老友・郭紹虞の手紙に接し、燕京大学中文系代理主任に請われた。これまでより多くの時間、彼が熱愛する文学研究と創作に従事できるため、彼はよるこんでこの招聘を受け、家をあげて北上し、商務での一〇年にわたる編集生活を終えた。⁽⁴⁶⁾

と述べ、王雲五のことには全く触れていない。だが高君箴は、

一九三一年、商務職工会は王雲五に反対する闘争を展開し、振鐸は毅然として商務の職を辞した。⁽⁴⁷⁾

と述べ、鄭振鐸の商務離任の理由は、王雲五との対立にあったことを明言している。息子の鄭爾康の言も、そして妻の高君箴の言も共に真実なのであろうが、ここは鄭振鐸本人の言を聞いてみたいところである。実は鄭振鐸は死の直前の一九五八年一〇月八日に行われた講演の中で、このことに言及している。この中で彼は、

(ヨーロッパから帰国して)再び『小説月報』を編集していた頃、王雲五はとも多くの規則を制定しました。職工会は王雲五打倒をかかげましたが、彼を打倒で

きなかったのです。彼はとどまり、私達は去りました。
(葉) 聖陶が去り、私も離れました。私達は資本家をも
ても激しく憎みましたが、これがほんやりとした社会主
義思想を持った理由です。⁽⁴⁸⁾

と述べており、商務離任の理由として対王雲五闘争を貫徹
できなかったことのみをあげている。やはり鄭振鐸は、王
雲五との対立がきわまったことを最大の理由として商務を
去ったと考えてよからうと思う。

だが、王雲五はこのことについて、何も発言を残してい
ない。⁽⁴⁹⁾そして鄭振鐸が去った直後の一九三〇年一〇月、研
究所を新設し、自ら所長を兼ね、海外視察の際にアメリカ
でスカウトした孔子諤ら八人の留学生を研究員として招き
入れて、主として企業実務を研究させた。⁽⁵⁰⁾こうして商務の
血は徐々に入れ替って行ったのである。

結びにかえて

鄭振鐸が商務を去った一九三一年、商務創業三十五周年
を記念して出版された『最近三十五年之中国教育』の中
に、莊俞「三十五年来之商務印書館」が収められてい
る。⁽⁵¹⁾これは『商務印書館大事記』を見る限りにおいては、初の
商務に関する回憶と記録をまとめた文章のようである。⁽⁵²⁾奇

しくも鄭振鐸が商務を去った年、商務は一つのくぎりをつ
けたのだった。

莊俞はこの一篇の中で、商務の歴史を振り返って次の四
期に分けている。⁽⁵³⁾

- ① 創業期：清の光緒二十三年（一八九七）の創業から、
光緒二十八年（一九〇二）の福建路移転まで。
- ② 中日合資期：光緒二十九年（一九〇三）の金港堂との
合資から、民国三年（一九一四）の日本資本回収前ま
で。
- ③ 発展期：民国三年（一九一四）の日本資本回収後か
ら、民国一四年（一九二五）まで。
- ④ 改革期：民国一五年（一九二六）から、今日（一九
三一）まで。

ここで注目されるのは、王雲五と鄭振鐸が商務に入った一
九二一年から、鄭振鐸が離任した一九三一年までの一〇年
間のうち、前半の五年間は発展期にあたり、後半の五年間
は改革期にあたることになることである。

発展期である一九一四―一九二五年は、商務がまさに飛
躍的發展をした時期で、莊俞が同文中に掲げている「商務
印書館歴年營業比較表」⁽⁵⁴⁾によると、營業総額は、一九一四
年には二、六八七、四八二元であったのに、一九二五年に

は八、七六八、二九九元と、三倍以上にもなっている。また、この時期には商務を代表する出版物である『辞源』（一九一五）、『四部叢刊』初編（一九一九）なども出ており、巨視的に見れば、上げ潮ムードに満ちた一種の黄金時代であった。そんな上げ潮ムードのまっただ中に王雲五と鄭振鐸は飛び込んだことになる。こんな時期の企業にはベンチャー精神にあふれた人材が必要とされ、鄭振鐸ら「新文学」青年が重んじられた。そして彼らは組織の規律にばられることなく、自由にふるまうことができ、上司である王雲五にも、とりたてて遠慮をすることがなかったのである。

ところが労働争議が商務にも飛び火した一九二六年からの改革期になると、企業としては職工会対策のため、企業内秩序統制を徹底する道を選ばざるを得なくなった。そして王雲五はその推進者として力をつけて行くのである。鄭振鐸はこのことにより自らの自由を制限される危険を感じ、職工会勢力と共に王雲五をあわよくば追い出そうとした。鄭振鐸が「彼（王雲五）はとどまり、私達は去りました」と言っていることがそれを証明している。つまり、「王雲五が去るか、自分達が去るか」の争いをしていたのである。だがこのことがいっそう企業内秩序統制強化の流れ

れを作ってしまった、結局は企業内秩序に収まりたくない鄭振鐸らは商務を去るしかなかったのではなからうか。

つまり、二人が共に商務に在籍した一〇年間のうち、前半の五年間は鄭振鐸が、そして後半の五年間は王雲五が、商務にとってより必要な人材だったということになる。

つまるところ、やはり商務は企業であり、対立していた新旧の文学にしても、世の購売意欲に合わせる、その時その時で売れる方に力を入れ、双方共売れるとなると、文学的理念にかかわらず双方共に抱き込んだ。商務がこういったあくまでも利潤を追求する企業であった以上、五四以降の新時代になって「新文学」が売れるとなると、鄭振鐸のような人材を取り込み、その後、企業の成長に伴って組織化が必要不可欠の最優先課題となると、王雲五のような人材を前面におしたてて「近代化」を進めようとしたことは、経営的選択としては最良のものであったのだろう。

ただ、こういった経営的選択は個人の手によって行われていたのではなかった。もちろん当時の商務には「教会派」を率いていた高翰卿や、「書生派」を束ねていた張元濟といった元老がいたが、高は商務創業者の一人というだけで、とりたてて営業手腕をふるったわけではなかったし、張は『四部叢刊』や『百納本二十四史』をはじめとする古籍影

印出版をすることが生きがいで、できればこれに没頭して
いたいたいタイプであったから、企業経営に執着したわけでは
なかった。だから、一九二〇年代の商務は、ある特定の人の
強いリーダーシップによって動かされていたのではな
く、色々な人の意見が微妙にバランス良く集約されて、進
む道を選択していたと言えるだろう。

そして案外、その微妙なバランスの上に乗っかってい
たのが革新派と思われている鄭振鐸で、そのバランスを壊
して「近代化」をおし進めようとしたのが保守派と思われ
ている王雲五ではなかったか——なども考えてみるのだ
が、このことは当時の商務に存在していた派閥の問題など
もからめて見ていかなければならないので、また稿を改め
て論じてみたい。

注

(1) 商務は一九〇三年から一九一四年まで、日本の教科書会
社・金港堂と合併を行っていた。

(2) 樽本氏の商務関係論文は以下の通りである。

。『金港堂・商務印書館・繡像小説』『清末小説研究』第三号
(一九七九・一一・一一) 所収。

。『商務印書館と夏瑞芳』『清末小説研究』第四号(一九八〇
・一一・一一) 所収、筆名使用(沢本郁馬)、中国語訳あり
篠松訳・汪家榕注『商務印書館と夏瑞芳』『商務印書館史資

料』二二(一九八三・七・二〇)

※ 以上三論文は樽本照雄『清末小説閑談』(一九八三・

九・二〇 法律文化社) 所収。

。『商務印書館と山本条太郎』『大阪経大論集』第一四七号
(一九八二・五・一五) 所収、中国語訳あり—東爾訳『商務
印書館と山本条太郎』『商務印書館史資料』四三(一九八
九・三・二〇)

。『商務印書館研究はどうなっているか』『清末小説から』第
一号(一九八六・四・一) 所収

。『初期商務印書館をもとめて』『清末小説から』第九号(一
九八八・四・一) 所収

※ 以上三論文は樽本照雄『清末小説論集』(一九九二・
一一・二〇 法律文化社) 所収。

。『商務印書館が触れたがらない事』『中国文芸研究会会報』
第一二二号(一九九一・三・三〇) 所収

。『商務印書館の火災』『清末小説から』第二二号(一九九一
・四・一) 所収

。『初期商務印書館の印刷物(上)』『清末小説から』第三三
号(一九九一・一〇・一) 所収

。『初期商務印書館の印刷物(下)』『清末小説から』第二四
号(一九九二・一一・一) 所収

。『統計表から商務印書館を見る(上)』『清末小説から』第
二五号(一九九二・四・一) 所収

。『統計表から商務印書館を見る(下)』『清末小説から』第

- 二六号(一九九二・七・一)所収
- 。『鍵としての高翰卿「本館創業史」』『清末小説』第一五号
 (一九九二・二・一)所収、筆名使用(沢本郁馬)
- 。『長尾雨山二題』『中国文芸研究会会報』第一三五号(一九九三・一・三〇)所収
- 。『初期商務印書館の謎』『清末小説』第一六号(一九九三・一二・一)所収、筆名使用(沢本郁馬)
- (3) 長沢規矩也「近代支那の図書及図書館」『アジア問題講座』第一〇卷(一九二九・一〇・二二)創元社) 四二二頁
- (4) 実藤恵秀「初期の商務印書館」『日本文化の支那への影響』(一九四〇・七・五) 叢書書院)
- (5) 中村忠行「清末の文壇と明治の少年文学」(一)『山辺道』第九号(一九六一・一二・一五)
- (6) 矢作勝美『明朝活字』(一九七六・一二・二〇) 平凡社)
- (7) 前出樽本照雄「金港堂・商務印書館・繡像小説」『清末小説閑談』三一九頁、および同「商務印書館と山本条太郎」『清末小説論集』三一八〜三一九頁。
- (8) 商務の創業者の一人である夏瑞芳が、一九〇二年に資本参加した張元済の提案を受けて、同年設立した編集翻訳機構。初代所長は蔡元培(兼任)で、その後、張元済、高夢旦、王雲五が所長をつとめた。
- (9) 陳福康『鄭振鐸年譜』(一九八八・三) 書目文獻出版社) 四七頁。
- (10) 鄭爾康「鄭振鐸在商務印書館的十年」『商務印書館九十年』

- 我和商務印書館』(一九八七・一) 商務印書館/以下『九十年』と略称) 二六六頁。
- (11) 鄭貞文「我所知道的商務印書館編訳所」『文史資料選輯』第五三輯初載。今、『九十年』二〇六頁による。
- (12) 王雲五『岫廬八十自述』(一九六七・七・一初版) 台灣商務印書館) 七七〜七八頁。
- (13) 前出鄭爾康「鄭振鐸在商務印書館的十年」『九十年』二六六頁。
- (14) 前出王雲五『岫廬八十自述』七九〜八〇頁。
- (15) 茅盾「商務印書館編訳所和革新《小説月報》的前後」『九十年』一八三〜一九七頁。
- (16) 同右一九七頁。
- (17) 前出陳福康『鄭振鐸年譜』による。
- (18) 同右七五〜七六頁。
- (19) 章錫琛「漫談商務印書館」『文史資料選輯』第四輯初載。今、『九十年』一一六頁による。
- (20) 同右一一六頁。
- (21) 同右一一七頁。
- (22) 前出陳福康『鄭振鐸年譜』一一七頁。
- (23) 『商務印書館大事記』(一九八七・一) 商務印書館) 一九二五年の頁。および前出陳福康『鄭振鐸年譜』一〇八頁。ちなみに王寿南『王雲五先生年譜初稿』(一九八七・六) 台灣商務印書館) 二〇九頁によると、一九三〇年の時点で、商務には印刷所職工会、発行所職工会、総務処職工会、編訳所職工会の四つ

の職工会があったという。

- (24) 前出陳福康『鄭振鐸年譜』九〇頁。
- (25) 「上海商務印書館職工の經濟闘争」張靜廬『中国現代出版資料(甲編)』(一九五四・一二 中華書局) 四四四～四四六頁。
- (26) 同右四五六～四五七頁。
- (27) 同右四五四頁。ちなみに編訳所からは他に沈雁冰(茅盾)、丁曉先の二人が代表となっている。
- (28) 同右四五五～四五六頁。
- (29) 前出王雲五『岫廬八十自述』一一八頁。
- (30) 同右一一八頁。
- (31) 張樹年主編、柳和城、張人鳳、陳夢熊編著『張元濟年譜』(一九九一・一二 商務印書館) 二六一～二六二頁。
- (32) 前出王雲五『岫廬八十自述』一一九頁。
- (33) 杜亜泉「記鮑咸昌先生」(一九二九・一一・一三)『鮑咸昌先生哀挽錄』初載。今、『九十年』一〇頁による。
- (34) 前出張樹年等『張元濟年譜』三三三頁。
- (35) 前出王雲五『岫廬八十自述』一一〇～一一二頁。
- (36) 同右一一〇頁。
- (37) 前出王壽南『王雲五先生年譜初稿』二四二～二四五頁。
- (38) 前出陳福康『鄭振鐸年譜』一六九頁。
- (39) 「商務印書館編訳所職工会宣言」『申報』(一九三一・一一 二二付) 第三版。
- (40) 前出王雲五『岫廬八十自述』一九七頁。
- (41) 同右一九七頁。
- (42) 同右一九八頁。
- (43) 「著作家の組合」『文芸新聞』週刊第五期(一九三一・四・一三) 初載。今、前出陳福康『鄭振鐸年譜』一七〇頁による。
- (44) 前出王壽南『王雲五先生年譜初稿』一八〇～二五四頁。
- (45) 前出陳福康『鄭振鐸年譜』一七七頁。
- (46) 前出鄭爾康「鄭振鐸在商務印書館の十年」『九十年』二七一頁。
- (47) 高君箴「鄭振鐸与『小説月報』の変遷」陳福康編選『回憶鄭振鐸』(一九八八・九 学林出版社) 一四五頁。
- (48) 鄭振鐸「最後一次講話」『新文学資料』一九八三年第二期(総第一期)(一九八三・五・二二 人民文学出版社) 一六三頁。
- (49) 前出王雲五『岫廬八十自述』、王雲五『商務印書館与新教育年譜』(一九七三・三 台湾商務印書館)、前出王壽南『王雲五先生年譜初稿』
- (50) 康錦泉「回憶王雲五在商務的二十五年」『出版史料』一九八七年第一期(総第七期)(一九八七・三 学林出版社) 一〇頁、『九十年』にも収録する。
- (51) 前出『商務印書館大事記』一九三一年の頁。
- (52) 同右全頁。
- (53) 莊爺「三十五年来之商務印書館」『商務印書館九十五年——我和商務印書館』七四二頁。
- (54) 同右七五一頁。

(55) “教会派” および “書生派” (または “非教会派”) については、陳叔通「回憶商務印書館」(一九六〇・一・一七)『出版史料』一九八七年第一期(総第七期)(一九八七・三 学林出版社)七頁(『九十年』にも収録する)、および、前出章錫琛「漫談商務印書館」『九十年』一〇九頁に言及されている。